

(九) 抑留中の生活と極限状態

① 乗りこえてきた信念……一度日本に帰りたいたいの
一心だった。

② 生死の境、死に直面したときの感想……家の者の
夢を見るが多かった。

③ 心身を支えた工夫……気力だけだった。一度、腹
いっぱい食べてみたいと思った。

(十) 帰還

① ダモイをいつ、どこで聞いたか……ニコライエフ
スクの作業所で聞いた。

② 集結地……ナホトカへ。

③ 乗船名……高砂丸(病院船) 昭和二十二年七月二
十七日

④ 船内生活……平穏だった。

⑤ 上陸地……舞鶴港入港

⑥ 収容期間……昭和二十年九月一日―二十二年七月
二十七日、一年十一カ月

(十一) 帰国後の生活

一年間は栄養失調で何もできなかった。その後は

家業の手伝い、農業で生活した。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

1 これからは戦争すべきでない。

2 家じゅう仲良く、よく働くことが大切だ。

3 親を大切にしろ。

抑留中の労苦記録

山梨県 天野 九二三

(一) 出生から入隊まで

① どこで出生……山梨県南都留郡忍野村内野

② いつ出生……大正九(一九二〇)年三月二十日

③ 学校……忍野村立小学校高等科二年

(二) ソ連軍侵攻前

① いつ入隊……昭和十七(一九四二)年十一月二十

七日 召集

② 入隊場所……東京麻布 東部第八部隊

東京麻布 第一輜重連隊

③ 駐屯地……満州国東寧県老黒山

戦地……駐屯地警備

(三) ソ連軍侵攻をどこで受けた

① いつ……昭和二十年八月十八日ごろ

② どこで……東寧県老黒山兵舎内

③ どんな状況で……ソ満鮮国境陣地で警備中終戦と

なり、老黒山に引き揚げた。

(四) 終戦

① 詔勅……聞かなかったが後に隊長から聞いた。

② 感想……日本は米国の科学に負けた。

③ どう終戦したか……ソ連軍と戦わず陣地を去った。

④ 武装解除から収容所入りまで……陣地から徒歩で

問島(延吉)へ出て、収容所に入って武装解除さ

れた。

(五) シベリア抑留地への移送

① いつ頃……昭和二十年八月二十三日ごろ。

② どの地点からどこへ送られた……問島収容所を

徒歩で出発、クラスキーノまで。クラスキーノで

貨車に乗る。

何日くらい……十日間

③ 第一次入所場所……コムソモリスク、コムソモリ

スク市アムール川沿岸

いつ……九月十五日ごろ

(六) 抑留地の生活

① 第一次収容所どこ……コムソモリスク

収容人員……千人

② 生活の様子……ドイツ人収容所、一棟百人以上

住まい……丸太積み木造半地下式、二段ベッド

食事……少なかった。雑穀だった。

仕事……鉄道敷設作業隊 ノルマ……あった

衣服……着たまま、支給なし。

入浴……一カ月一回そこそこ

シラミ……出た、多発。 南京虫等……出た

伝染病……なかった。下痢は多かった。

③ 作業の状況

主作業……鉄道の敷設作業、土砂を貨車で運び道

造り。

ノルマ達成状況……いつも一〇〇%以上だった。
単位……個人にもあった。

中隊または収容所……一〇〇%以上やった。
グループ……良いノルマを上げた。

④給与……支給なし

(七) 労役

①どういう労役についたか……土砂運搬、積載、貨車の積み込み、枕木作り、敷設作業等

②収容人員……五百人くらい

宿舎……五棟、一棟百人

③冬最低温度……零下四〇度

冬はどうして生活したか……ペチカで温まった。

作業は零下三〇度休み。

労役が一つに止まらないときはどうしたか……みんなで順に使役に出た。

④労役の時間……午前八時から午後五時、八時間

内容……鉄道敷設

⑤労役に堪えられない者はどうされたか……三級弱者は休養室へ、病人は入院させた。

⑥健康管理は……一カ月一回くらい、健康診断があった。

⑦常日頃健康を保つ上で役に立つことは……食料が少なく、野草やヘビ、ネズミ、カエルなどを食べた。

⑧衣服について扱われたことは……着たままだった。冬は防寒外套を貸してくれた。

(八) 抑留者の統制管理

①労役につく基準……健康度一級、二級者。

②労役免除……三級者は軽作業、病人は入院。

③健康管理……一カ月一回、女医による健康診断。

④点呼・作業場への出入……朝と晩、作業場への出入に衛門前で点呼。

⑤着衣・衣服……着たまま。

⑥食事の状況……定量の表示はあったが、いつも少なかった。

⑦休日……日曜休日と決まっていたが、休ませなかった。

⑧収容所施設、構造……木造丸太造り、ドイツ人収

容所跡。

⑨ 洗脳教育……昭和二十一年夏ごろから毎週二時間。

⑩ 収容所生活全般……皆、協力して良く働いた。

⑪ 懲罰……みんなよく働いたので、なかった。

(九) 抑留中の生活と極限状態

① 乗りこえてきた信念……生きて故郷へ帰りたい。

② 生死の境、死に直面したときの感想……日本の土を踏むまでは死にたくない、と。

③ 心身を支えた工夫……体に気をつけて、休める時は休んだ。気力だった。

(十) 帰還

① ダモイをいつ、どこで聞いたか……昭和二十二年

八月一日ごろ、収容所長発表。

② 集結地……コムソモリスクから貨車でナホトカ

へ。

③ 乗船名……信濃丸(昭和二十二年八月二十七日)

④ 船内生活……平然だった。

⑤ 上陸地……舞鶴港

⑥ 収容期間……昭和二十年八月十五日―二十二年八月二十五日、二年一カ月(二十五カ月)

(十一) 帰国後の生活……父の家業の農業に従事した。

(十二) 最後に子孫や国民に言い遺したいこと

1 戦争をなくして世界の人々と平和に暮らすこと。

2 家内仲良く、よく働けば、みんな安心して仲良く暮らすことができる。

3 体を大切にしろ。

抑留中の労苦記録

山梨県 長田 十一

(一) 出生から入隊まで

① どこで出生……山梨県南都留郡忍野村忍草

② いつ出生……大正十二(一九二三)年八月四日

③ 学校……忍野村尋常校高等小学校